

## 子どもの遊びと仕事に関する一考察：日本と台湾との事例研究を通して

柯, 芳月  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/2244076>

---

出版情報：九州人類学会報. 18, pp.40-52, 1990-07-31. Kyushu Anthropological Association  
バージョン：  
権利関係：

# 子どもの遊びと仕事に関する一考察

## 一 日本と台湾との事例研究を通して 一

柯 芳 月

本稿は、九州大学大学院教育学研究科において平成元年度に提出した修士論文の要約である。

### I 序論：研究の目的及び方法

まず、本論で使う子どもの「遊び」と「仕事」を規定しておきたい。子どもの遊びの概念規定はホイジンガの遊び論を基底として定義したものである。子どもの遊びとは、純粹に自発的意志（功利的な目的を持たない）に基づく自由な活動であり、かつ一定のルールに従い、拘束力を持っている活動でもある。子どもの「仕事」は深谷、丸山に従い、子どもの家事手伝いと勉強を指すことにする。

日本でも台湾でも高度な経済成長により、急速な都市化と社会変化が生起し、これが子どもにも大きな影響を及ぼした。本論においては、子どもがどう変わったのかを子どもの行動の本質と考えられる「遊び」と「仕事」を観察し、日本、台湾における子どもの遊びと仕事の比較を通して、子ども文化を理解することを目指した。この目的を達成するために、まず、今日における子どもの遊びと仕事の問題点を検討する必要がある。

遊びの問題点は次のようである。①遊び時間の減少化。②遊び空間の縮小化。③行動範囲の地域社会から学校への移行。④遊び仲間の少人数化、同年齢化（タテ型からヨコ型への移動）。⑤遊具の高価化。

仕事の問題点は家事手伝いと勉強に分けられる。(1)家事手伝いは「必要でなくなった」、「しなくなった」、「出来なくなった」というようになった。(2)勉強は次のような問題点が挙げられる。①学校の試験の点数が重視されすぎる。②学歴主義が日本、台湾両社会とも根強く存在しているので、学校だけの勉強は不十分で、塾に依存するようになった。③学校の学力水準の平準化が要求されたから、勉強遅れの生徒は国語や算数の塾に通うようになった。④生活体験を通しての学習が相対的に減少している。

以上述べたことは、今日における子どもの遊び、家事手伝い、学習の問題点である。それを見ると、まるで、今日では、子どもの遊び、家事手伝い、学習は短所ばかりで、長所はないという錯覚が出てくるのかも知れない。

勿論、今日の教育には、教育成果としての長所もたくさんある。それらの長所は戦前の教育では、問題点であった所が多いと思う。

子どもによりよい生活を過させ、子ども一人一人の持っている長所を伸ばすために、戦前の長所、短所と今日の長所、短所を再確認しておく必要があると思われる。

以上述べたことを整理して、戦前と今日の子どもの遊び、家事手伝い、学習に関する長所、短所を簡単に対比すると、次のような表が出てくる。

## 遊び、家事手伝い、学習に関する戦前、今日の比較

戦 前

今 日

### 長 所

- |                              |                              |
|------------------------------|------------------------------|
| 1 自然な遊び場が多い。<br>危険を避ける工夫をした。 | 1 知的情報が豊富。                   |
| 2 勉強の圧力がなかった。                | 2 労働が少ない。                    |
| 3 進学競争がなかった。                 | 3 生活が豊か。                     |
| 4 地地域社会の人間関係が親しい。            | 4 系統学習。                      |
| 5 創造性のある遊具。                  | 5 子どもの心身発達のため、保健衛生教育が普及している。 |

### 短 所 (問題点)

- |            |                 |
|------------|-----------------|
| 1 知的情報が貧困。 | 1 自然な遊び場が少ない。   |
| 2 労働が過重。   | 2 勉強の圧力が重い。     |
| 3 生活が苦しい。  | 3 進学競争が激しい。     |
| 4 放任教育。    | 4 地域社会の人間関係が薄い。 |
|            | 5 既製品の遊具が多い。    |
|            | 6 過保護。          |

学習、家事手伝い、遊びに関する戦前の長所を今日において最大限に伸ばし、また、戦前の短所を長所に転化することが今後の最も重要な課題だと考えられる。

本論では、次の四点を目的として研究を進めたい。

- ① 日本と台湾との子どもの行動様式の実態を明らかにする。この際、特に、子どもの行動の本質と考えられる遊びと仕事を焦点におき、観察、記述する。
- ② 急速な都市化、工業化の過程の中で、子どもの遊びと仕事はどう変わって来たのかを明らかにする。
- ③ 上記②の問題を究明するために、日本と台湾を取り上げ、比較する。
- ④ 子ども文化を通して、大人文化を窺うことが出来る。

本論では、通文化的比較によって、子ども文化を理解することを目指し、さらに、これを通して、大人文化を理解するための糸口として若干の資料を提供したいと考える。

具体的な調査方法は次の通りである。

質問紙法：調査は1988年7月から10月にかけて、大分県日田市と台湾省台北市で実施した。調査対象は各々小学校三校（中心部、中間部、農村部）六年生各2クラスである。

面接、参与観察法：対象、期日は質問紙と同じである。

## II 現代における子どもの遊びの意義と実態

本章は文献研究の部分である。本論で使う「遊び」と「仕事」の理論的根拠を論じた。さらに、子

どもの遊びの教育的意義と実態を述べた。子どもの遊びの教育的意義に関する考察は藤本と柴谷の説を取り上げて、批判的に論じた。子どもの遊びの教育的意義は大きい、他面、否定的な場合もあり得ることを指摘した。

今日子どもの遊びの実態は「室内で、一人きりで、体を動かさずに受け身の形である。」と深谷が指摘した。この実態と本論の第一章に述べた遊びの問題とは一致している。

### Ⅲ 日本の事例調査

#### － 大分県日田市の事例を中心として －

ここでは日本での現地調査（質問紙）の結果と分析を行った。

遊び：①時間：日田市の平均遊び時間（放課後）は106.8分で、総理府の日本の全国調査によると、日本の子どもの放課後の平均遊び時間は96分である。②遊び場：室内遊びが多くなっており、都市と農村との差は殆どない。特に、農村では遊び空間がまだ多いのに、室内遊びが都市と変わらないことから農村の子どもも室内遊びに熱中していることが分かった。③遊びの内容：ファミコン、テレビを見ることなどが多い。

仕事：①手伝い時間：日田市の平均手伝い時間（33.9分）は、総理府による日本の全国調査結果（平均24分）より長い。これは遊びよりも手伝いの方が学校の方針として浸透し易いからとの説明があった。②手伝いの内容：三地域にそれほどの差はない。主な手伝いの内容は買い物、食事の用意や後片付け、部屋の掃除、動植物の世話、風呂の掃除と準備などである。これは総理府による日本の全国調査とはほぼ同様である。③勉強時間：日田市の平均勉強時間は82.2分であり、総理府による日本の全国調査結果（平均108分）より少ない。④国語や算数の塾に通う比率（13.2%）が習字、そろばんなどのけいこごとに通う比率（46.6%）より低い。日田市では学校外での教育を重視していることが分かった。

### Ⅳ 台湾の事例調査

#### － 台湾省台北市の事例を中心として －

ここでは台湾での現地調査（質問紙）の結果と分析を行った。今まで、台湾では子どもの遊びと仕事に関する全国調査の報告がないので、全国との比較は出来ない。遊び：①時間：平均遊び時間は、82.2分であり、1時間しか遊ばない子どもは中心部では男女とも50%以上である。（男：54%、女：56.8%）②遊び場：中心部、中間部では自分の家の中が多い（両地域とも50%以上）のに対して、農村部では戸外が多い（男女平均52.4%）。③遊びの内容：室内遊びはテレビゲーム、テレビを見ること、チェスが多く、戸外遊びはドッチボール、かくれんぼが多い。仕事：①手伝い時間：台北市の平均手伝い時間は68分で、農村部では、男女とも手伝い時間が長い。（男：85分、女：96分）中心部、中間部では、平均して約50%の子どもが帰宅後約30分手伝っている。②手伝いの内容：食事の用意や後片付け、部屋の掃除、動植物の世話など軽い手伝いが多い。男女の差が少ない。これは親のしつけと「男は外、女は内」の伝統的な考え方がなくなったことが原因だと思われる。③勉強時間：平均は99分であり、中心部、中間部では3時間以上の子どもがかなりいる（男女平均：中心部16.7%、中間部11.9%）ことから台湾の勉強の実状が窺える。④国語や算数の塾に通う比

率の平均は31.1%で、中心部は50.5%もあるのに対して農村部では4.8%しかない。

## V 日本と台湾との比較

本章では、文化人類学の方法——面接と参与観察で得られた資料を比較、検討したうえで、Ⅲ、Ⅳの質問紙の答えとの関連性はどうなっているのかを検討してみる。本章の検討の理論的根拠はⅡで取り上げたアリエス（遊び論）とウェーバー（仕事論）の視点、方法によった。

### 1. 面接、参与観察の概要

- (1) 面接対象：質問紙調査と同じ対象の中で、一校10人ずつ（男5人、女5人、成績は普通）を面接した。参与観察は筆者が小学校で面接した生徒と一緒にいて、記録した資料である。放課後の子どもの生活状況は筆者が直接生徒に聞いただけでなく、面接した当日、放課後の生活時間表も生徒に書いてもらった。生徒に面接して、不備な点については先生や親たちに会って面接した。
- (2) 面接調査の時期：大分県日田市は1988年9月7、8、9の三日間であり、台湾省台北市は1988年9月30日、10月3日、4日の三日間であった。

### 2. 日本と台湾における小学校年中行事の違う点について

日本：一年は三学期に分けている。

一学期：4月1日から7月19日

夏休み：7月20日から8月31日

二学期：9月1日から12月22日

冬休み：12月23日から1月7日

三学期：1月8日から3月24日

学校の生活時間表（日田市立桂林小学校）

	平 日	水 曜	土 曜
職員朝会	8:20 ~ 8:25		8:20 ~ 8:25
朝 会	8:30 ~ 8:40	平	
朝 の 会	8:45 ~ 8:55		8:30 ~ 8:45
1 限	8:55 ~ 9:40	日	8:45 ~ 9:30
2 限	9:45 ~ 10:30		9:35 ~ 10:20
3 限	10:45 ~ 11:30	通	10:35 ~ 11:20
4 限	11:35 ~ 12:20		
給 食	12:20 ~ 13:00	り	
昼 休 み	13:00 ~ 13:30		
清 掃	13:35 ~ 13:50		11:25 ~ 11:40
5 限	13:55 ~ 14:40	帰りの会	13:55 ~
6 限	14:45 ~ 15:30	研 修	14:30 ~
帰りの会	15:30 ~ 15:45		11:45 ~ 12:05
児童下校	16:20		12:15
職員退勤	16:50		12:25

台湾：一年は二学期に分けている。

一学期： 9月 5日から 1月20日（旧正月に合わせて、毎年少し違う）

冬休み： 1月21日から 2月15日

二学期： 2月16日から 7月 5日

夏休み： 7月 6日から 9月 4日

学校の生活時間表（台湾省すべての小学校の学校生活時間表が文部省に統一されている）

	平 日	土 曜
交通当番（高学年の生徒）	7:25 ~ 7:45	
自 習	7:45 ~ 8:00	
職員朝会	7:50 ~ 8:00	
朝 会	8:00 ~ 8:20	半
健康教育	8:20 ~ 8:40	
1 限	8:45 ~ 9:25	
2 限	9:35 ~ 10:15	
3 限	10:25 ~ 11:05	日
4 限	11:15 ~ 11:55	
昼 ご 飯	12:00 ~ 12:20	
昼 休 み	12:20 ~ 13:00	
清 掃	13:00 ~ 13:15	
5 限	13:15 ~ 13:45	
6 限	13:50 ~ 14:30	
7 限	14:40 ~ 15:20	
8 限	15:30 ~ 16:10	
帰りの会	16:10 ~ 16:50	
児童下校	16:50	
職員退勤	17:00	

まず、日田と台北における子どもの遊び観と仕事観に関する相異は日本人と中国人のより基本的な考え方や価値意識の相異に関係があると考えられる。その具体的な例として、質問紙の回答の中で、差異（日田と台北）が最も大きい三項目を取り上げて、文化的要因から論じてみた。

1. 宿題と遊びとではどちらを先にするか。日田では遊んでから宿題する子どもが多い（52%）。

台北では宿題してから遊ぶ子どもが多い（72%）。

2. 明日試験があるのに、今夜、おもしろいテレビ番組がある時どうするか。

日田では先にテレビを見てから勉強する子どもが多い（54%）。台北では絶対に見ない子どもが多い（62%）。

3. 遊んでいる時に、親から手伝うようにと言われた場合はどうするか。

日田では少し遊んでから手伝う割合が高い（53%）。台北ではすぐ帰って手伝う割合が高い（63%）。

以上述べた結果をウェーバーと見田宗介の論に従って考察した。

台湾では、子どもの遊びと仕事とは対立的な概念という点はウェーバーの仕事論と一致している。台湾の社会では親の子どもに対する期待は、子どもの「立身出世」である。その唯一の方法は絶えず勉強する（高学歴を持つと言う意味）ことである。この「立身出世」の考え方は台湾、日本とも根強く存在している。日本近代の主導精神は「立身出世主義」であったと見田は言った。しかし、今日の日本社会では、一般に“中流意識”が浸透しており、また、「間人主義」（浜口恵俊）で、人間関係や物事の“調和”が重視されていると言う。これら二つの意識（中流意識と調和）が子どもの遊び観、仕事観にも影響を及ぼしていると思われる。即ち、“中流意識”の影響で、日田市では子どもの遊びと仕事とは対立的ではなく、より幅広い教養的学習へと傾斜しているようである。また、“調和”意識の影響で、日田市の親は子どもの仕事と遊びとの調和を考えている。教科書のみ勉強よりも「よく遊び、よく学べ」が実践されている。

以上述べたことをⅡで取り上げたアリエスやウェーバーの視角、方法から論じてみよう。

まず、Ⅱで述べた遊びと仕事の概念を簡単にまとめる。

### 1. 遊び論

アリエスの遊び論（注1）

- (1) 遊びはもともと祝祭における行事であった。
- (2) ルイー三世（1601年）頃、大人と子どもの遊びとは区別しなくなった。同じ遊びが大人と子どもの双方に共通であった。
- (3) 17世紀当時 遊びと共同体の宗教的儀式との間には緊密な関係が存在していたが、後世になって遊びと宗教的シンボリズムを超脱して世俗的個人的になった結果と同時に徐々に子ども専用のものになっていく。
- (4) 大人と子どもの遊びが分離されたと同時に道徳的基準によって、いい遊びと悪い遊びが分類された。悪い遊びが子どもに禁止してしまった。このごろプロテスタントの職業召命観に基づく労働の意識が形成された。

ホイジンガの遊び論（注2）

- (1) 人間の文化は遊びにおいて、遊びとして成立し、発展した。つまり、すべての文化現象は遊びの中で発生し、初めのうち文化は遊ばれた。
- (2) ホイジンガのいわゆる遊びとは日常生活とは違うものである。

### 2. 仕事論

- (1) 職業の初めの概念は二つの意味を持っている。

宗教的意味 — 神の召命である。（天職）

世俗的意味 — 世俗的な職業を指す。（仕事）

つまり、仕事はもともと宗教的な観念を帯びていた。仕事をする目的は金儲けではなくて、神の栄光を増やさせて、神によって救われることにある。結果として、利潤は蓄積され、また蓄積された利潤は再投資に回される。

私的消費は最小限に切り詰められる。節約＝節欲である。この「世俗内的禁欲」はウェーバーがプロテスタンティズムの倫理だと言った。

(2) 仕事と遊びとは対立的なものである。

次にⅢ、Ⅳに述べた日本と台湾との事例からどのようにアリエスの遊び論やウェーバーのプロテスタンティズムの仕事観と結び付いていくのかという問題について考える。

① 台湾における資本主義：人生の価値は金儲けであり、金儲けは自分の老後の生活保障や子どもに財産を残すためである。

台湾では、親が子どもに遊びを抑制したことは、仕事と遊びとは対立的な概念であるから。今は勉強で、将来有名校に入ったら、卒業したら、よい職業が得られる。よい職業が得られると、金儲けが出来る。仕事（勉強）をするためには、禁欲（遊び）する。

② 日本における資本主義：社会の現実は一貨幣によって、支配されているということの中流幻想によって、見えなくされている。

今日の日本と台湾の資本主義とウェーバーの資本主義を対比してみよう。

台湾：

子どもの遊びと仕事とは対立的な概念である。これはウェーバーの議論と一致する。しかしながら、台湾の資本主義の「禁欲」は宗教上の意味は殆ど持っていない。台湾の社会における「禁欲」は現世における自分の老後の生活保障のためとか、子どもに財産を残すとか。なぜ、このような考えがあるのか。これは台湾の社会では、父系社会のイデオロギーを持っているのではないと思われる。

台湾の社会では、中国人の考え方の代表とも言える「忠孝」（五倫の中の君臣、父子の關係に相当する）と「立身出世」の思想に影響を及ぼした。

子が親に対して、「孝」が必要だと強調されている。「孝」とは簡単に言えば、親に喜ばせるという意味である。昔、経済が今日ほど豊かでなかった時代には子どもが金儲けして、おいしい食べ物を親に食べさせることであったが、今日の経済成長した豊かな社会では「孝」は親が子どもに期待することを達すれば、これは今日の「孝」と言う解釈だと思われる。親が子どもに期待することは何か。子どもの「立身出世」である。立身出世の唯一の方法は絶えずの勉強である。これは高学歴社会の一つの原因だと思われる。

ウェーバーの資本主義は「禁欲」は宗教上の意味を強く持っている。禁欲は神の栄光を増やし加え、自身が神によって、救われている意味を持った方が強い。現世よりも死後あの世のためである。

日本：

見田宗介は『現代日本の心情と論理』の中で、日本近代の主導精神は立身出世主義であり、明治以来の急速な「近代化」過程において、内面的、主体的な推進力を用意したものは立身出世主義であったと述べている。（注3）

立身出世とは「身を立て、名を揚げ」という意味であり、個人の立身出世は常に、背後にあって<家郷>（「家」を中心とする共同体の期待を背負う。）の期待意識によって、拍車をかけられた。家郷に錦を飾るという現実の動機づけがあった。日本のこの立身出世の考え方と中国人の立身出世の考え方とは同じである。しかしながら、今日では、日本近代化以後の状況を迎え、「立身出世」の観念は薄れ、社会全体が平均化され、日本全体が「中流幻想」に包まれている。この意識が子どもの遊び観、仕事観にも影響している。

日田市では、子どもの遊びと仕事とは対立ではない。より幅広い教養的なものを習うべきというこ

とを重視している。これは今日の日本社会における資本主義の思想の中心である“中流幻想”の影響だと思われる。

## VI 結 論

本論をまとめると、次の七つの結果が得られた。

1. 一般的に現代の子どもは勉強時間が長く、手伝いの時間、遊び時間が短くなったと指摘された。今回の調査では、この現象も現れている。調査した結果と既存の歴史的な推移に関する資料を比較したら確かに、指摘されたような結果が出てきた。
2. 遊び場が室外より室内へ移り、遊具は既製品の消費型になり、遊びの創造性が少なくなり、活動的でなくなってきた。こういう傾向は、日本でも台湾でも同様である。ただ、台湾の農村部では、戸外の遊びや早寝早起きの習慣が残され、ファミコンなどの遊びが少なく、伝統的な農村の生活形態が保たれている。
3. 遊び時間が勉強時間に奪われつつあることは、今日の子どもの実態である。
4. 台湾では、遊び、家事手伝いなど親の権威による規制が残されている。
5. 経済余裕のある今日では、家事の電気化、合理化により子どもの家事手伝いは必要でなくなった。
6. 子どもの遊びはレジャーの方向に発展しつつある。
7. 日本では、農村の都市化は台湾より普遍的である。

本調査では全ての項目から見れば、一般的に日本では、都心部と農村部の差が少ない。殆ど同様であることが多い。つまり、都市化の影響で農村部も都市化された。一方、台湾では、都心部と農村部の差が大きく、都市化の影響がまだ農村内部にまで浸透していないことが分かる。都市化が進んでも農村では、伝統的な特色を保っているのである。

以上の結果について、筆者は次のような考えがある。

### (1) 結果1について

これは両国とも同じ傾向があり、その根本的な原因は受験の激しい教育制度と国民の根強い「立身出世」、「学歴」に対する考え方にあると思われる。

中国の諺では「萬般皆下品、唯有讀書高」（世の中で最も上品な人は学問の持っている人である。）という。

台湾では、企業の新入社員の採用でも学歴が違えば初任給が違ふ。最近では、民間企業だけでなく、公務員や、教師の昇進までも学歴次第である。さらに、日本では「週休二日制」も学校教育に普及されるという提言さえもある。しかしながら、進学の実質的な緩和されないと、「週休二日制」が定形教育システムに導入されても、表面上は子どもの自由時間は増えたが、実際には、学校外の勉強時間が増える一方という結果が推測されると思われる。

### (2) 結果2について

室内型や体を動かさない遊びが増えたのは、時代の流れとコンピューター普及の今日では、避けても避けられないいわゆる現代遊びの特徴とも言えると考えられる。このような現状の元で、今までの遊びの教育的役割や子どもに対する教育的意義について、もう一度考え直さなければならないと思われる。いたずらに、現代の子どもに戦前の遊び形態の教育的意義を当てはめさせるのは無理だと思わ

れる。

(3) 結果3について

これは2の考察と関連があると考えられる。遊びの教育的意義が肯定されない以上、遊び時間は減る一方である。

(4) 結果4について

親の権威が強く子どもに影響を及ぼすことについて、これは中国人の子どもが親に対する態度一つのパターンである。ベネディクト(Benedict, R. F.)が『文化の型』の中で述べているように「パターン」とは、その文化の中にある様々な要素の中での統一ある全体的組み合わせを言う。(注4) 中国文化の中で儒教の影響もその諸要素の一つではないかと考えられる。

(5) 結果5について

家事手伝いが必要でなくなったことは今日の実態である。これはデューイの言った「体験を通しての学習」という教育理念が無視されているのではないと思われる。筆者は教育関係者や親がどういふふうに関与のチャンスを子どもに提供するかということが今日の教育上の重要な課題であると思う。最も効果的な方法は小学校のカリキュラムの中に入れるようにすることである。

(6) 結果6について

実際に子どもの遊びを観察すると、遊びはレジャーの方向に発展していくのが見られる。遊びのレジャー化も教育的意義を持っているとジョン・ロックは述べた。(注5) この子どもの遊びのレジャー化は注視されるべきだと思われる。

(7) 結果7について

都市文明の浸透という観点から見ると、日本は台湾より進んでいると言えるだろう。農村における都市化の状況を見ても、日本の場合はかなりの程度進んでいるのに対して、台湾ではこれほどはないと思われる。しかしながら、「文化」という観点においては、必ずしもそうとは言えないだろう。例えば、都市化の状況の中で教育観はどのように変容するか、あるいは、日本と台湾とはどう違うのかというようなことは「文化」の問題として考えなければならない。ボアズ(Boas, F.)が「文化相対論」について述べたように、二つの異なる文化を比較する時は、どちらが優れているか、どちらが劣っているかという判断は出来ない。(注6) 従って、筆者が試みた日本と台湾との比較は優劣の比較の問題なのではなく、文化の差異に関わる問題なのである。Vで述べたように、遊びや仕事については人々がどのような価値観を持っているかを問わねばならない。

最後に筆者がこの論文のIに述べた研究の目的をどの程度検証出来たかをふり返ってみよう。

まず、本論のIに述べた研究の目的を検討してみよう。

- ① 日本と台湾との子どもの行動様式の実態を明らかにする。この際、特に、子どもの行動の本質と考えられる遊びと仕事を焦点におき、観察、記述する。
- ② 急速な都市化、工業化の過程の中で、子どもの遊びと仕事はどう変わってきたのかを明らかにする。
- ③ 上記②の問題を究明するために、日本と台湾を取り上げ、比較する。
- ④ 子ども文化を通して、大人文化を窺うことが出来る。本論では、通文化的比較によって、子ども文化を理解することを目指し、さらにこれを通して、大人文化を理解するための糸口として若干の

資料を提供したいと考える。

①については、日本、台湾両国とも一つの地域を選択して、子どもの遊びと仕事を観察、記述した。時間の制約で今の時点では全面的な調査ができなかった。もし、日本と台湾両国での観察期間がもっと長かったら、子どもの生活行動をよりよく観察し、その結果と質問紙の答えとを比較することによって、本論文はもっと厳密な結果が出てきたかと思われる。

②については、本論では通時的研究調査（歴史的推移）はしなかったが、文献研究を通して、比較した結果で論じた。ただし、その資料は全面的にヨーロッパの資料に限定されてしまった。

③については、日本と台湾の事例研究をし、比較した。

④については、子ども文化を理解することは結局、大人文化を理解することであり、逆もまた言える。つまり、両者の関係は相互依存的である。子ども文化と大人文化の相互関係については、本論では多少なりとも明らかにしたと思う。勿論、残された課題は多いが、この点では本論は意義があったと思う。

従来、文化人類学の研究は、多く無文字社会を取り扱ったものであったが、文化人類学は必ずしも無文字社会のみを対象にすべきだという理由はどこにもない。重要なのは異文化の比較というその基本的なものの見方にある。筆者がここで試みようとしたのは、この見方で子どもの生活を反省的に捉えることであった。結果は十分に達成されたとは言いがたいが、この論文を書き進めていく中で、筆者の心の中に文化人類学への関心とそれを通して子ども文化を理解する道が開けてきた。文化の継承は子どもによって達成される。筆者は、これからも子どもがどのように文化を継承していくのかについて、関心を持ち続けたい。本研究で得られた知見を簡単にまとめると次の通りである。

- ① 台北市では農村部を除いて、子どもの遊びや家事手伝いが軽視され、勉強重視が甚だしい。その主な原因は、進学への圧力が強く、さらに、親たちが子どもの遊びや家事手伝いの教育的意義を十分認識していないからだと思われる。
- ② 日田市では、台北市よりも地域差が少なく、また、遊び・家事手伝いと勉強とのバランスが比較的よく取れている。
- ③ 現代の子どもは勉強時間が長く、家事手伝いと遊びの時間が短くなったという一般的通念が今回の調査で実証的に確認されたが、同時に、台北市の農村部では、戸外遊びが多く、伝統的な農村の生活形態が保たれていることも明らかになった。
- ④ 台北市では、遊び、家事手伝いに関して、親の権威による規制が日田市より以上に強く働いている。
- ⑤ 日田市では、教科書の勉強のほかに、遊びや家事手伝いなどの経験学習を台北市以上に重視している。

要するに、日本、台湾両社会では、共に子どもに対する進学への圧力が強く、このままでは仮に学校週五日制が導入されても学校外の勉強時間が増えるだけで、「よく遊び、よく学べ」は実現しにくいと思われる。

日田市と台北市における子どもたちの行動を比較することによって、両文化の価値観の異同を若干明らかにすることが出来たと思う。この意味で、本論を今後の研究のための一つのステップとしたい。

注

- (1) Aries Philippe 1980. 『<子供>の誕生』 (杉山光信・恵美子共訳) みすず書房.  
pp. 61-95.
- (2) Huizinga, J. 1938, Homo Ludens, Paris (高橋英夫訳 『ホモ・ルーデンス』 中央公論社  
1963年)、p. 73
- (3) 見田宗介 1971年 『現代日本の心情と論理』 筑摩書房 pp. 185-199.
- (4) 蒲生正男 1978年 『現代文化人類学のエッセンス』 ペリカン社, p. 193.
- (5) ジョン・ロックはその著『教育に関する考察』の中で、力説している。レクリエーションは怠けていることではなくて、仕事を終えて疲れている心身を休めることである。
- (6) Garbarion, M. S. 1977. Sociocultural Theory in Anthropology, Holt, (木山英明・大平裕  
司訳 『文化人類学の歴史』 新泉社 1987年), p. 122.

参 考 文 献

- 青柳まちこ 1984年 『「遊び」の文化人類学』 講談社
- 阿利 莫二他 1979年 『子どものシビル・ミニマム — 視点と生活実態』 弘文堂
- 井上 俊 1977年 『遊びの社会学』 世界思想社
- 井上 俊 1981年 『遊びと文化』 アカデミア出版会
- 井上 健 1973年 「子どもの生活時間と遊び」 『東京大学教育 学部紀要』第13巻
- 岩田 慶治 1985年 『子ども文化の原像』 日本放送出版協会
- 大塚 久雄 1977年 『社会科学における人間』 岩波書店
- 蒲生 正男 1978年 『現代文化人類学のエッセンス』 ペリカン社
- 京都大学教育学部 教育人間学研究室 1988年研究報告集1 『子どもたちの生活時間と日常生活』
- 柴野 昌山 1985年 『教育社会学を学ぶ人のために』 世界思想社
- 柴谷 久雄 1972年 『遊びの教育的役割』 黎明書房
- 住田 正樹 1985年 『子どもの仲間集団と地域社会』 九州大学出版社
- 住田 正樹 1988年 「子どもの仲間集団の相互作用過程分析」 『九州大学教育学部紀要』  
第34集
- 総理府青少年対策本部 1987年 『日本の子供と母親 — 国際比較 — 改訂版』 大蔵省印刷局
- 祖父江孝男他 1982年 『文化と人間』 小学館
- 田浦 武雄 1979年 『教育人類学』 福村出版株式会社
- 高倉 翔 1974年 「遊びの教育学 — 遊びの教育学的考察」 『児童心理』第6巻8号
- 永野 重史 1974年 「遊びの心理学」 『児童心理学』第28巻8号
- 南里 悦史、酒匂 一雄 1984年 『子どもの発達と日常生活 — 学力と人格を育てる —』  
ぎょうせい
- 西村 清和 1989年 『遊びの現象学』 勁草書房
- 日本教育社会学会 1973年 『教育社会学の基本問題』 東洋館出版社

- 日本総合愛育研究所 1988年 『1988/89 日本子ども資料年鑑』 中央出版株式会社
- 野田 高巳 1988年 「広報淡窓」 『大分の教育先哲』 (大分県小学校校長会)
- 浜口 恵俊他 1979年 『子どもの発達と教育1 子どもの発達と現代社会』 岩波書店
- 浜口 恵俊 1982年 『間人主義の社会 日本』 東洋経済新報社
- 原 ひろ子 1979年 『子どもの文化人類学』 昌文社
- 深谷 昌志 1987年 『放課後の子供たち』 伊藤忠記念財団
- 深谷 昌志 1983年 『孤立化する子どもたち』 日本放送出版協会
- 深谷昌志・和子 1987年 『遊びと勉強』 中央公論社
- 藤本浩之輔 1976年 『子どもの遊びを見直そう』 第三文明社
- 藤本浩之輔 1974年 『子どもの遊び空間』 日本放送出版協会
- 増田 靖弘 (代表) 1989年 『遊び大事典』 東京書籍株式会社
- 丸山 孝一 1989年 「南タイ・イスラム社会における労働倫理の形成基盤」  
『九州大学教育学部紀要』第40集
- 見田 宗介 1971年 『現代日本の心情と論理』 筑摩書房
- 見田 宗介 1967年 『価値意識の理論』 弘文堂
- 見田 宗介 1965年 『現代日本の精神構造』 弘文堂
- 箕浦 康子 1984年 『子どもの異文化体験』 思索社
- Ariès. Philippe 1960. 『<子供>の誕生』 (杉山光信・恵美子共訳 みすず書房 1980年)
- Caillois. R. 1958, Les Jeux et Les Hommes. Paris, Gallimard (清水幾太郎、霧生和夫訳  
『遊びと人間』 岩波書店 1958年)
- Cummings. W. K. 1988. ニッポンの学校 (市川昭午編『教育システムの日本の特質』 教育開  
発研究所) 所収
- Dewey, J. 1915. The School and Society, Chicago. The University of Chicago Press (宮  
原誠一訳 『学校と社会』 岩波書店 1957年)
- Dore, R. P. 1988. 学歴社会 — 新しい文明病 (市川昭午編 『教育システムの日本の特質』  
教育開発研究所) 所収
- Garbarion. M. S. 1977. Sociocultural Theory in Anthropology, Holt, (木山英明・大平裕  
司訳 『文化人類学の歴史』 新泉社 1987年)
- Huizinga, J. 1938. Homo Ludens, Paris (高橋英夫訳 『ホモ・ルーデンス』 中央公論社  
1963年)
- Pier, M. W. 1972, Play and Development, New York: W.W.Norton. (赤塚徳郎・森  
訳 『遊びと発達の心理学』 黎明書房 1984年)
- Russell. B. A. W. 1926. On Education, Allen and Unwin (堀 秀彦訳 『教育論』 角川書  
店 1958年)

#### 中国語の参考文献

- 樊 景周 1986年 『國民小学校大班級制之研究』 台北市長江書局新竹師範専門学校

1986年 『國民小學校課程標準實施成 研究』 台灣省教育部印刷局

趙 文芸 1984年 『國民小學生的課外讀物』 台灣省教育部印刷局